

デジレ＝マグロワール・ブルヌヴィルと宗教 ―病院のライシテ化と宗教病理学―

田中 浩喜

はじめに

本稿では、19 世紀末のフランスの医師デジレ＝マグロワール・ブルヌヴィル（*Désiré-Magloire Bourneville* : 1840-1909）を、宗教学の観点から論じる。具体的には、パリの病院のライシテ化とサルペトリエール学派の宗教研究という、ブルヌヴィルが取り組んだ 2 つの活動について論じる。パリの病院のライシテ化とは、修道女を病院から追放して世俗的な看護婦に置き換えることで、病院から宗教色をなくそうとする動きのことである。また、サルペトリエール学派とは、サルペトリエール病院の医師ジャン＝マルタン・シャルコーが率いた医師グループのことである。

ブルヌヴィルの名前は現在、日本でもフランスでも、近代神経学の父シャルコーの弟子として、あるいは知的障碍児教育の先駆者として、わずかに知られているにすぎない。しかし、宗教学の観点からすると、ブルヌヴィルは二重に興味深い存在である。ブルヌヴィルは第三共和政初期のパリにおいて、病院のライシテ化とサルペトリエール学派の宗教研究という、2 つの宗教関連の問題に取り組んだ人物だからである。とはいえ、病院のライシテ化と医学的な宗教研究という問題は、その歴史的な重要性にもかかわらず、今日ではほとんど忘れられてしまっている。

まず、これまでのライシテ研究は、教育分野を特権的な対象として扱ってきた⁽¹⁾。歴史研究において強調されるのは、1880 年代に進められた学校のライシテ化の重要性である。反対に、病院のライシテ化の歴史は、フランスでも近年までほとんど注目されてこなかった。歴史家のジャクリヌ・ラルエットは、比較的早い 1991 年に病院のライシテ化の重要性を指摘しているが⁽²⁾、医療分野を主題化したライシテ研究が本格的になされるようになったのは、政教分離法の制定から 100 周年にあたる 2005 年前後のことであり、現在も先行研究の数は限られている⁽³⁾。

次に、これまでの宗教学史研究は、フランスにおける宗教社会学の伝統を強調してきた。しかし、戦前のフランスには宗教心理学の系譜も存在している。実際、古野清人やピナール・ド・ラ・ブーレイといったかつての宗教学者は、その宗教学史研究のなかで、宗教社会学と並ぶフランス宗教学の重要な潮流として、宗教心理学を挙げている。そして両者は、この宗教心理学の源流として、シャルコーらサルペトリエール学派による医学的な宗教研究を重視している。しかし、今日の宗教学史研究において、このサルペトリエール学派の宗教研究が注目されることはほとんどない⁽⁴⁾。

そこで本稿では、パリの病院のライシテ化とサルペトリエール学派の宗教研究という 2 つの問題を、ブルヌヴィルを中心に据えて考察する。第 1 章では、医師ブルヌヴィルのプロフィールを、文筆家としての側面と政治家としての側面にわけて紹介する。第 2 章では、政治家ブルヌヴィルが推進したパリの病院のライシテ化の経緯を示したあと、その両義性をジェンダーの観点から考察する。最後に第 3 章では、文筆家ブルヌヴィルが貢献した医学的な宗教研究の概要を示したあと、それを

19 世紀末のフランスという社会史的な文脈に位置づける。

本論に入るまえに、ブルヌヴィルについての先行研究を整理しておきたい。ブルヌヴィル研究は、主に 3 つの関心からなされてきた。第 1 に、社会史的な関心がある。ジャック・レオナルやジャン・ゴールドシュタインは、19 世紀フランスにおける医学と政治の交錯の具体例として、ブルヌヴィルに言及している⁽⁶⁾。第 2 に、教育学史的な関心がある。ジャクリーヌ・ガトー＝メヌシエや星野常夫は、知的障害児教育の先駆者としてのブルヌヴィルに焦点を当てている⁽⁶⁾。第 3 に、看護史的な関心がある。ヴェロニク・ルルー＝ユーゴンやキャトリーヌ・シュルティスは、第三共和政前期の看護専門職の形成と女性化の文脈にブルヌヴィルを位置づけている⁽⁷⁾。

これらのブルヌヴィル研究は 1990 年前後に集中している。その理由のひとつは、制度的なものである。1980 年代には、医療社会史と医療認識論の研究グループや、神経病や神経科学の歴史研究グループといった、医療史関連の研究グループが組織されており、1990 年には、フランス神経学史学会が設置されている。もうひとつの理由は、1990 年と 1993 年がそれぞれ、ブルヌヴィル生誕 150 年とシャルコー没後 100 年にあたるという、象徴的なものである。フランスでは 1990 年に、ブルヌヴィル生誕 150 年シンポジウムが催されている⁽⁸⁾。本稿はこれらの先行研究を参照しつつ、宗教学の観点からブルヌヴィル研究に貢献することを目指している。

1. ブルヌヴィルの多面性

ブルヌヴィルが医師であったことは、比較的よく知られている。近代神経学の父シャルコーの弟子、ビセートル病院の精神病医、知的障害児教育の先駆者といった側面のことである。しかし、医学史家のジャック・ポワリエらが言うように、「この人間とその著作は、ひとつのイメージに収めるにはあまりに複雑で多面的である」⁽⁹⁾。そこで、本章では、ブルヌヴィルがという医師だけでなく、文筆家でもあり政治家でもあったことを指摘する。

1-1 文筆家としてのブルヌヴィル

ブルヌヴィルは 1840 年 10 月 20 日、ウール県の小村ガランシエールの小地主家庭に生まれた。コレラの流行により中等教育は中断されてしまったが、ブルヌヴィルは医師を志ざして、家族の知人で隣村出身の精神病医フランソワ・ドラシオーヴを訪ねた。当時ビセートル病院に勤めていたドラシオーヴは、同郷の若者の才覚を見抜いて、パリ大学医学部に進学することを勧めた。かくして、ブルヌヴィルは医学への道を踏み出すことになった⁽¹⁰⁾。

シャルコーとの出会いは、ブルヌヴィルがまだ研修医だった 1868 年のことである。シャルコーは当時、すでに医学界での地位を固めつつあり、そのもとにはとても優秀な研修医たちが集まっていた。しかし、こうした研修医たちのなかでも、ブルヌヴィルは少し変わっている。というのも、ブルヌヴィルは飛び抜けて成績優秀というわけではなかったのである。実際、1865 年の研修医試験に合格した 42 名のうち、ブルヌヴィルは 31 位という微妙な成績で終わっている⁽¹¹⁾。医学生としてはあまり成績が振るわなかったにかかわらず、ブルヌヴィルをシャルコーの最大の協力者にし、さらに政治家としての成功をもたらしたのは、文筆家としての才能であった。

ブルヌヴィルの文才は医学生の間から発揮されている⁽¹²⁾。上京して間もない 1861 年に最初の医学論文を発表したあと、翌年には『現代医学』にも論文を投稿している。1862 年から 1870 年ま

では、ドラシオーヴ主宰の『精神医学雑誌』に投稿を重ねながら、その編集作業にも非公式に協力している。医学生を中心に創刊された『医学運動』にも寄稿しており、1871年から1873年まではその編集委員も務めている。共和主義と進歩主義を融合させた『医学運動』の精神はその後、名実共に『医学の進歩』へと継承されることになる。

文才が披瀝されたのは医学系雑誌だけではない。ブルヌヴィルは1867年以降、左翼系雑誌にも投稿を行なっている。特筆されるのは、急進共和主義者シャルル・ドレスキュルーズの主宰する2つの雑誌である。1867年のパリ万国博覧会に合わせて創刊された『産業と芸術のパンテオン』に寄せたコラムには、最新の医学機器の紹介の合間に、反教権主義的な言明が紛れ込んでいる⁽¹³⁾。1870年の『目覚め』には「悪魔憑き年代史」が連載されており、そこでの反教権主義と宗教研究の融合はその後、本稿の第3章で論じる『悪魔憑き叢書』へと継承されることになる⁽¹⁴⁾。

文筆家ブルヌヴィルの代名詞といえる『医学の進歩 (Progrès Médical)』は1873年に創刊されている。ブルヌヴィルは創刊から1907年までこの雑誌の編集長を務めている。『医学の進歩』はブルヌヴィルが10年近く関わってきた雑誌『医学運動』の後継誌である。数多くの執筆者が『医学運動』から『医学の進歩』へと移籍しているし、当初の編集事務所は『医学運動』と同じ、パリ第5区のエコール通り6番地にあった。両誌のレイアウトの類似も見逃せない。

ブルヌヴィルが編集長を辞するまでに、ページ数は増加したとはいえ、雑誌の構成は創刊号の原型を保ち続けている⁽¹⁵⁾。1873年6月14日の創刊号を紐解いてみよう。まずは講義録がある。ブルヌヴィルが収集したシャルコーの臨床講義、およびコルニルの病理解剖学講義とマルセの産科臨床研究である。そして時評欄が続く。社会問題を報じる時評欄は、政治雑誌としての『医学の進歩』の中樞になる。あとには医学系学会の会議報告、医学系雑誌のレビューが掲載されている。そしてパリの諸病院の報告をまとめた病院情報欄があり、医学関連の雑多な情報を集めたニュース欄で終わっている。その後、雑誌には消息欄や特集欄が付け加えられることになる。

雑誌『医学の進歩』の特徴は、最先端の医学への学術的な関心と社会問題への政治的な関心が同居しているところにある。医学的な関心の高さは、この雑誌が生物学協会の動向に注目しているところに現れている。保守的な医学アカデミーがパストゥール革命を否定するなか、クロード・ベルナールが率いる生物学協会は、最新の医学的発見を公表する前衛的な学術協会だった。社会的な関心の高さは、この雑誌が病院衛生の改善や感染症患者の隔離、知的障碍児教育や病院のライセンス化の必要性を訴えているところに現れている。

明らかなのは、『医学の進歩』が急進的なまでの進歩主義を掲げていることである。実際に、この雑誌を貫いていたのは、科学に対するある種の「信仰」だった。編集会議では、後に大物となる若手医師がブルヌヴィルを囲んでいる。アナフィラキシー・ショック研究でノーベル生理学・医学賞を受賞するシャルル・リシェ。急進共和派議員になるマルセル・ボドゥアン。パリ大学医学部教授になるエドゥアール・ブリソーなどである⁽¹⁶⁾。リシェは後年、創刊当時を次のように回顧している。

医学が英雄だった時代 (…), 『医学の進歩』を創刊し編纂した編集者たちの魂の状態を一言で特徴付けねばならないとしたら、私はそれを科学への信仰であると言うだろう。進歩の友である勤勉な学生と医師たちの雑誌は、まさしくそのためにあった (傍点引用者) ⁽¹⁷⁾。

ブルヌヴィルを語るうえで『医学の進歩』に言及することが不可欠なのは、この雑誌がブルヌヴィルの政治活動と深く連動しているからである。実際、議員時代のブルヌヴィルは、自身に取り組む社会問題に関する論説をこの雑誌に度々掲載している。次節では、ブルヌヴィルの政治家としての側面を紹介しよう。

1-2 政治家としてのブルヌヴィル

1878年から1899年の第三共和政初期に出版されていた雑誌に、『今日の人々 (Les hommes d'aujourd'hui)』というものがある。当時の重要人物を毎号1人紹介しているこの雑誌は、歴史家にとって最良の史料のひとつである。ヴィクトル・ユゴーやレオン・ガンベッタなど、紹介されるのがもっぱら共和派の人物であることから分かるように、『今日の人々』は共和派の雑誌である。フランス文学者の倉方健作は、創刊から1883年までのこの雑誌の性格について次のように述べている。

この時期を特徴づけているのは、その強烈な「反教権主義」**anti-cléricisme**である。これは依然として影響力を振るう教会の権威を削ぎ、司祭職や修道者、神学生が保持するさまざまな特権を奪うことを目的としている。60号から107号にかけて、紙上に『反教権週間』**La Semaine anticléricale**という定期刊行物の広告が頻繁に掲載されていることから、この時代の『今日の人々』が棹差す流れは明らかである。(…)この時期の『今日の人々』とは、共和派の人脈に支えられた書店の、明確な政治的メッセージが反映された刊行物であったと言える⁽¹⁸⁾。

パリ市議会議員時代の1881年、ブルヌヴィルは『今日の人々』の第157号にとりあげられている⁽¹⁹⁾。ここからは、ブルヌヴィルが1880年代の共和派のあいだで強い存在感をもっていたことがわかる。表紙のイラストには、右手には『医学の進歩』を、左手にはパリの病院を管轄するアシスタンス・ピュブリークという組織の予算報告書を握りしめたブルヌヴィルが描かれており、その予算報告書には「改革!!! 改革!!! 改革!!!」と書きなぐられている。このイラストが示しているように、ブルヌヴィルは議会と『医学の進歩』を通して、数多くの改革を主張している。

ブルヌヴィルは1876年5月、パリ第5区のサン＝ヴィクトール地区からパリ市議会議員に選出されている。当時はパリ市議会の支出する補助金が、アシスタンス・ピュブリークの予算の多くを占めており、パリの病院運営に強い影響力を及ぼしている⁽²⁰⁾。市議会における病院関連の各種決定は、専門の議会委員会に委ねられているが、ブルヌヴィルはそこで予算案の作成を担っており、パリの病院運営に関して強い影響力をもっている。かくして、市議時代のブルヌヴィルは、『医学の進歩』と連動させながら、病院のライシテ化や児童精神病院の充実などの改革を要求している。



図1:『今日の人々』第157号の表紙
Les hommes d'aujourd'hui, III^e
volume, 1880-1881 (東京大学文学部
図書館蔵) から抜粋。

1883 年 2 月、ブルヌヴィルは他界した共和派の老将ルイ・ブランに代わって、パリ第 5 区の国民議会議員に選出されている。1885 年の国民議会選挙でも当選して、順調に 2 期目を務めている。ブルヌヴィルは国民議会でもさまざまな改革に取り組んでいる⁽²¹⁾。たとえば、医学部教授の退職年齢を定めて人員交代を促すことや、医学部に実技学校を設けることなどが主張されている。しかし、1889 年の国民議会選挙でブーランジストのアルフレッド・ナケに敗北すると、ブルヌヴィルは政治の表舞台から退くことになる。

政治家としてのブルヌヴィルのキャリアは、19 世紀末フランスの典型例である。歴史家の長井伸仁による第三共和政前期のパリ市議会議員の^{プロソポグラフィ}集団伝記研究によると⁽²²⁾、その特徴は、弁護士やジャーナリストといった専門職の多さと、市議会を経て国民議会へと転出する者の多さの 2 つである。医師という専門職にあり、市議会議員も国民議会議員も務めたブルヌヴィルは、これらの条件を満たしている。とはいえ、パリ市議会議員の初当選時の平均年齢が 44 歳だったとすれば、36 歳で初当選したブルヌヴィルは政治家として比較的早熟だったと言える。

さらに、第三共和政前期の国民議会では数多くの医師が活躍している。医療社会史家のジャック・レオナルドによると、1876 年から 1903 年のあいだに、医師の国民議会議員は最少で 45 人(1876-77 年：全議員中 8.4%)、最多で 70 人(1893-98 年：全議員中 12.3%)にのぼる。その大多数が共和派だったことにも注目したい。ポール・ベール、エミール・コンブ、クレマンソーの名前はよく知られているが、彼らが政治家であると同時に医師であったことはあまり知られていない。第三共和政初期において、まさに医師は『知と権力のあいだ』⁽²³⁾にいたのである。医師でありながら国民議会議員でもあったブルヌヴィルは、この点でも典型的な人物と言える。

また、歴史家のベルナール・ブレが指摘するように、ブルヌヴィルの政治的影響力はその交友関係に根ざしている⁽²⁴⁾。ブルヌヴィルはまず、シャルコーを通して大物政治家たちの面識を得ている。たとえば、共和派の首領ガンベッタや、後の首相ルネ・ワルデック＝ルソーなどである。ブルヌヴィル自身も、共和派の政治家たちと個人的な親交を育んでいる。クレマンソーは同年代の友人であり、それぞれの主宰する雑誌を通して協力関係を保っている。ブルヌヴィルは第三共和政初期の有力な共和派の政治家たちと、強い結びつきを持っていたのである。

このように、ブルヌヴィルは医師というだけでなく、文筆家でも政治家でもあった。以下では、ブルヌヴィルが政治家として取り組んだ病院のライシテ化について第 2 章で論じたあと、ブルヌヴィルが文筆家としての能力を発揮したサルペトリエール学派の宗教研究について第 3 章で論じる。

2. パリの病院のライシテ化とその両義性

ブルヌヴィルはその政治生命をパリの病院のライシテ化に注いだ。パリの病院のライシテ化は、追放と代替の 2 つを軸にしている。一方で、患者の良心の自由の名において、それまで看護を担っていた修道女たちが病院から追放されている。他方で、市議会からの補助金を得た看護学校が設立され、修道女の代わりとなる世俗看護婦が養成されている。こうした病院のライシテ化は一部の医師からの反発を招いている。本章では、まずパリの病院のライシテ化の展開とその論争に注目し、次にジェンダーの観点から病院のライシテ化の両義性を指摘する。

2-1 パリの病院のライシテ化の経緯

19世紀のフランスは、教権派と共和派の対立に特徴づけられる。歴史学において、この対立は「2つのフランス」の対立として定式化されてきた。一方の教権派はフランスを「(カトリック)教会の長女」にしようとしており、他方の共和派はフランスを「革命の娘」にしようとしている。そして、19世紀後半のフランスでは、女性の位置がこの対立の重要な争点になっている。後に教育のライシテ化を実現するフェリーは、1870年の演説で次のように述べている。

今日、近代民主主義を受け入れない(…)旧態の社会と、フランス革命を継承する社会との間には、表には出ませんが根深い対立があります。(…)この対立の中で、女性は中立ではられません。(…)民主主義は教会から女性を取りあげねばなりません。民主主義は死を覚悟で選ばねばなりません。市民の皆さん、選ばねばならないのです。女性は科学の側につくべきなのか、それとも教会の側につくべきなのかを⁽²⁵⁾。

しばしば言及されるのは、第三共和政初期における世俗的な女子教育の制度化である。1879年法は各県にひとつ女子師範学校を設置することを定め、1880年のカミーユ・セー法は女子中学と女子高校の設置を定めている。後者の法律はもはや、必修科目に宗教教育を含めていない。1882年のフェリー法は、初等教育のライシテ化、義務化、無償化を定めた法律として知られているが、そこでは男子だけでなく女子も対象になっている。共和主義者たちは、学校教育を通じた啓蒙によって、教会から女性を取りあげようとしているのである⁽²⁶⁾。

教育分野での議論と並行して、医療分野でも女性は教権派と共和派の対立の争点になっている。病院のライシテ化は、ライシテの歴史上とても重要な出来事のひとつである。そこでは、病院での看護業務を担うのはカトリックの修道女であるべきなのか、それとも世俗的な看護婦であるべきなのか争われている。そして、それまで病院で看護業務を担っていた修道女を追放して、専門的な職業教育を受けた世俗看護婦に置き換えることで、パリの病院のライシテ化を進めようとした人物こそ、パリ市議会と国民議会で活躍していたころのブルヌヴィルである。

フランスのほかの都市に先駆けて、病院のライシテ化の先陣を切ったのはパリである。ブルヌヴィルは、1876年にパリ市議会議員に就任すると、すぐさま病院のライシテ化に向けて動き出している。普仏戦争での敗北の記憶が色濃い当時、参照されるのはイギリス、ドイツ、スイスなど諸外国の状況である。実際、ブルヌヴィルは1877年に市議会の代表として、イギリスの病院の視察に赴いている。ブルヌヴィルはその後、いまだ病院に修道女がいるフランスは、病院のライシテ化が進んでいる諸外国に遅れを取っており、早急にライシテ化を進めねばならないと主張している⁽²⁷⁾。

また、病院修道女の宣教行為から患者の良心を守らねばならない。ブルヌヴィルは、病院修道女の宣教行為による患者の良心の自由の侵害に繰り返し警鐘を鳴らしている。たとえば、1880年5月1日の『医学の進歩』では、地方の病院で起きたある事件が報じられている。それによると、ある患者が何度も拒否したにもかかわらず、病院修道女が執拗に信仰告白を迫り、絶望したその患者は窓から身投げをして死亡したという⁽²⁸⁾。ブルヌヴィル自身が認めるように、病院のライシテ化は、学校のライシテ化と同じく、良心の自由の名のもとに進められているのである。

私たち共和主義者がやむことなく教育のライシテを要求し続けているのは、良心の自由の名においてです。私たちがアシスタンス・ピュブリークのライシテを求めるのもまさしく、(…)この同じ良心の自由のためであります(1880年3月17日パリ市議会での発言)⁽²⁹⁾。

パリ市議会は1878年以降、ブルヌヴィルを中心に、病院のライシテ化に向けて動きだしている。第一に、パリの病院のライシテ化には、修道女の追放という側面がある。ライシテ化以前のパリには約500名の病院修道女が存在しており、たとえば、聖アントワヌ病院やコシャン病院では聖マルタ会の修道女が、ネッケル病院では愛徳の娘会の修道女が勤務していた。しかし、1889年夏までに16の病院で修道女の追放が完了しており、修道女が残っているのは、アウグスティノ会の修道女が務めるオテル・デュウ病院⁽³⁰⁾と聖ルイ病院のみとなっている⁽³¹⁾。パリの病院のライシテ化が、ブルヌヴィルが政治家として活躍した時期と重複していることは意味深い。

第二に、パリの病院のライシテ化には、世俗看護婦による修道女の代替という側面がある。修道女を追放する分、足りなくなった人手を世俗看護婦で置き換えねばならないというわけである。そこで、1878年には、サルペトリエール病院とビセートル病院に看護学校が設置されている。同年の8月には早速、共和派の医師や政治家12名とともに、看護学校に補助金を支出することをパリ市議会に嘆願している⁽³²⁾。さらに1880年には、ライシテ化された直後のピティエ病院に新しい看護学校が設置されている。看護教育では、ブルヌヴィルを中心とした学校経営者たちがみずから作成した、計5巻の通称『看護婦マニュアル』が用いられている⁽³³⁾。

職業教育の講義では、解剖学、生理学、応急処置、病院運営法、助産術、衛生学、医薬品処方などが教えられた。たとえば、病院運営法では、看護学校設立の経緯やアシスタンス・ピュブリークをはじめとするパリの病院制度の内容などが教えられている。その内容は共和主義の色合いが強い。実際、『看護婦マニュアル』ではフランス革命が賛美されているほか、看護学校設立の目的が次のようにまとめられている。「市立看護学校の目的は、病院スタッフの最良の人材採用を保証すること、いまだに病院に居座っている修道女たちを世俗のスタッフに置き換えることです」⁽³⁴⁾。

ところで、パリの病院のライシテ化は一部の医師による反発を生んでいる。1881年にアシスタンス・ピュブリークの内部諮問委員会がパリの病院のライシテ化を追認すると⁽³⁵⁾、翌月には異議申立ての手紙が90名分以上の医師の署名とともに、アシスタンス・ピュブリークの局長宛てに送られている⁽³⁶⁾。病院のライシテ化に賛成する議員が多数派を占めるパリ市議会によって病院のライシテ化は断行されるが、その後も反対運動は根強く残ることになることになる。

興味深いことに、病院のライシテ化に対する反対運動の先頭に立ったのは、共和派の医師アルマン・デプレ (Armand Després : 1834-1896) である。プロテスタント家庭出身のデプレは、ブルヌヴィルと同じく共和派の政治家である。1884年から1890年までパリ市議会議員を、1889年から1893年まで国民議会議員を務めている。しかし、急進共和派のブルヌヴィルとは違い穏健共和派に属している。パリの病院のライシテ化をめぐる1880年代の論争は、ブルヌヴィルとデプレの対立に収斂したところがある。次節では、両者の論争の内容をジェンダーの観点から分析する。

2-2 パリの病院のライシテ化の両義性

エリザベート・バダンテールは『母性という神話』のなかで、母性愛は女性に生来的なものでは

なく、近代の歴史的産物にすぎないと主張した⁽³⁷⁾。バダンテールが論駁したのは、女性性に押しつけられた母性本能という神話である。しかし、近代フランスにおいて女性性に押しつけられていたのは、子供を教育する母親としての生来的な資質だけではない。パリの病院のライシテ化をめぐる論争から浮かび上がるのは、病人を看護するという生来的な資質もまた、19世紀末の女性性に押しつけられていたということである⁽³⁸⁾。

ブルヌヴィルは病院のライシテ化を擁護するために、いくつかの実際的な理由をあげている⁽³⁹⁾。まず、医学の進歩により、医師には有能な助手が必要になっている。こうした医学上の要請から、諸外国では看護学校が設置されているにもかかわらず、フランスではいまだに専門教育を受けていない修道女が看護を担っている。次に、看護修道会の人手不足という問題がある。教育分野では免許制度の導入により、優秀な女性はわざわざ修道会に入るという手段を取らずとも市民社会で活躍できるようになっている。これにより今日の修道会は人手不足に陥っており、看護師学校で養成した世俗看護師によって足りない人手を補わねばならないという。

これに対して、デブレも実際的な理由をあげて病院のライシテ化に反対している。たとえば、修道女なら1人年間200フランのコストで済むが、世俗看護婦には年間700フランを要する。実際、コシャン病院のライシテ化には18,000フランかかっており、これは患者を20人収容可能な病院をひとつ建てられるほどの額である。デブレはある演説のなかで、「不幸な人びとの病床が不足しているという時に、アシスタンス・ピュブリークという行政機関の財源をこれほど無駄に浪費するべきではありません」と述べて喝采を受けている⁽⁴⁰⁾。しかし、これらの実際的な建前のほかに、ブルヌヴィルとデブレの対立を生んでいるのは、女性に関する見解の相違である。

デブレの議論には、すべての女性は修道女である場合を除いて、家庭の妻であり母親であらねばならないという前提がある。フランスでは19世紀を通して、女性労働の是非が社会的な議論となっている。女性労働に反対する者たちにとって、女性性と家庭性は不可分の関係にある⁽⁴¹⁾。19世紀半ば、ジュール・ミシュレは「女性労働者！冒瀆的で汚れた言葉」と書きながら、「女性は家庭をもたねばならない。結婚しなければならない」と主張している⁽⁴²⁾。政治学者のジュール・シモンはそれに「労働者になる女性はもはや女性ではない」との解釈を加えている⁽⁴³⁾。デブレにとっても、修道女である場合を除いて、女性の家庭性は看護職と両立不可能である。

私はここにおられる女性市民の皆さまにこう問いかけたい。夫の体調が優れないとき、子供が病床に伏せているとき、家庭の母である既婚女性は、病人の看護に必要な気高さを保てるでしょうか。市民のみなさま、答えは否であります。こうした状況に置かれた女性は、出来の悪い母親になるか、出来の悪い看護婦になるかのどちらかでしょう⁽⁴⁴⁾。

それゆえ、看護は家庭を持たない修道女に担われなければならないということになる。それゆえ、デブレが病院のライシテ化に反対したのは、穏健共和派としてカトリックとの妥協を模索していたからではない。実際、デブレはカトリックを「抑圧的な宗教」として批判している⁽⁴⁵⁾。さらに、デブレは修道女の人格さえ認めていない。デブレは1886年の演説で、「修道女とは非人格的な存在です。修道女は名前さえ持ちません。修道女はシスターと呼ばれるのです」と述べて喝采を受けている⁽⁴⁶⁾。そして、この反教権主義者はここから驚くべき議論を展開している。

感染症患者の部屋，麻疹患者の部屋，クループ患者の部屋，天然痘患者の部屋というものがあります。家庭の母親をそんなところに放り込んでよいものでしょうか。夫や子供のところへ病気を運びかねないのではないのでしょうか。（…）もしこれが修道女なら，この点に何ら心配はございません。修道女が感染症に罹ってもそれは覚悟のうえです。その修道女が死んだら他の修道女で置き換えればいい。それだけのことです⁽⁴⁷⁾。

他方でブルヌヴィルは，世俗的か宗教的かを問わず，あらゆる女性には看護婦としての資質が同程度備わっていると論じている。なぜなら，ブルヌヴィルによれば，看護が要求するのは女性性そのものだからである。ここには，宗教的であることと看護婦であることの分離をみることができる。言い換えれば，看護婦であることはもはや，宗教的であることを要求しないのである。この意味で，ブルヌヴィルは看護婦に求められる資質をライシテ化したとすることができるだろう。実際，ブルヌヴィルは1880年12月26日，ある講演で次のように論じている。

修道女に最良のものがあるとしても，宗教がそれを与えたわけではありません。それはなによりも，その修道女に残っている女性なるものの資質なのです。そして，彼女がそれらの資質を保持していればいるほど，彼女はより善良なのであり献身的なのであります⁽⁴⁸⁾。

たしかに，現代の観点から言えば，ブルヌヴィルによる病院のライシテ化は，女性の社会進出に貢献したと言えなくもない。世俗女性が労働することに対する批判が強まるなか，社会で活躍したいと願う女性は，修道女になって教育や看護に携わるのが通例であった。そうしたなか，ブルヌヴィルは看護の資質をライシテ化し，世俗女性に専門教育を施すことで，女性が世俗の環境に身を置きながら看護職として社会進出することを可能にしたという積極的な評価もできなくもない。

しかし，ここにはブルヌヴィルによる病院のライシテ化の両義性もみることができる。たしかにブルヌヴィルは看護の資質をライシテ化しているが，論敵であるデブレと同じように，看護の資質を相変わらず女性性と結び付けているからである。たしかに，女性性と家庭性をアプリオリに結び付けて看護婦としての資質を論じたデブレとは異なり，ブルヌヴィルはもはや女性性と家庭性をアプリオリに結び付けないまま看護婦としての資質を論じている。しかし，ブルヌヴィルもデブレも，看護を担うのが女性であることは当然視しているのである。

さらに，第三共和政初期において，看護婦は医師に比べて低い地位に置かれていたことも忘れてはならない。実際，医学の進歩を理由にブルヌヴィルが世俗看護婦に求めたのは，「献身的なだけでなく知識教養も備えてもおり，常時働ける余計な懸念のない補佐役（強調点筆者）」でしかない⁽⁴⁹⁾。ここにも病院のライシテ化の両義性をみることができる。ブルヌヴィルは女性の社会進出への道を拓いていると言えなくもないが，医学界が女医の存在に嫌悪感を示していた当時⁽⁵⁰⁾，女性（＝看護婦）に用意されたのは男性（＝医師）の補佐役，「第二の性」でしかないのである⁽⁵¹⁾。

3. サルペトリエール学派の宗教病理学とその社会史的位置づけ

文筆家ブルヌヴィルの成果は『医学の進歩』だけではない。ブルヌヴィルは実のところ，サルペ

トリエール学派で行われていた医学的な宗教研究でもその文才を発揮している。本章ではまず、今日の宗教学史からはほとんど忘れられてしまった、サルペトリエール学派の医学的な宗教研究の枠組みを紹介する。そして次に、科学的世界観と宗教的世界観が対立を深めた 19 世紀末フランスという文脈における、医学的な宗教研究の社会的な意味について考察する。

3-1 サルペトリエール学派の宗教病理学

サルペトリエール学派の全盛期である 1880 年代は、フランス宗教学の黎明期に位置している。しばしば言及されるのは、1879 年のコレージュ・ド・フランス宗教史講座の設置や 1886 年の EPHE 第 5 部門（宗教学部門）の設置である。しかし、今日の視点から語り直される宗教学史の影に隠れて、当時の医師たちも宗教研究を行っていたことは、あまり知られていない。そうした医学的な宗教研究の中心にいたグループこそ、ブルヌヴィルのいたサルペトリエール学派なのである⁽⁵²⁾。

ブルヌヴィルはサルペトリエール学派のなかでも早くから宗教研究に着手している。1875 年の著作『科学と奇蹟——ルイズ・ラトーあるいは聖痕を受けたベルギー女性』は、当時話題を呼んだある事件を取りあげている⁽⁵³⁾。1868 年以降、ベルギーの少女ルイズが、イエスや聖母マリアの幻視を伴う神秘的恍惚を体験したうえに、その手足に聖痕が現れたのである。この事件は、自然科学では説明不可能な超自然的な奇蹟として報じられた。ルイズは聖人として崇敬の対象となり、ルイズの住むボワ＝デーヌには西洋各地から巡礼者が訪れるようになっていた。

ブルヌヴィルは医師として、ルイズの神秘体験は超自然的な奇蹟ではなく、ヒステリー患者にみられる自然現象であると主張している。「個々の症状を取りあげてみれば、それらは全部ヒステリーの臨床記録のなかに見出せることがわかる」⁽⁵⁴⁾。聖痕のような傷跡は発作を繰り返したヒステリー患者によくみられることだし、ルイズが神秘的恍惚状態に陥る周期はヒステリー患者の発作の周期と同じである。ブルヌヴィルに言わせれば、ルイズの神秘的恍惚と聖痕は超自然現象などではなく、ヒステリー患者によくあるごく自然な「症状」でしかないのである。

シャルコーも『信仰による治癒』のなかで、同時代の奇蹟の問題を扱っている。この著作は信仰の力で起こるとされる聖地での治癒現象に関心を寄せている。シャルコーによれば、たしかに信仰により病状が快復する事例は存在する。そして、それらの事例は、医学的に説明不可能であるがゆえに奇蹟と呼ばれてきた。しかし、「この語彙でまとめられてきた事象は、私たちの理解を逃れるものでは決してない」⁽⁵⁵⁾。それは、精神が身体に影響を与えるほど暗示にかかりやすい状態に陥ったヒステリー患者によくみられる現象なのである。

サルペトリエール学派の宗教研究の代名詞は、ブルヌヴィルを編者として 1882 年から 1902 年にかけて刊行された『悪魔憑き叢書』（別名『ブルヌヴィル・コレクション』）である⁽⁵⁶⁾。この叢書は全 9 巻から構成されているが、その大部分はサルペトリエール学派の全盛期である 1880 年代に刊行されている。現代の事例を論じた『科学と奇蹟』や『信仰による治癒』とは違い、この叢書の大半は過去の宗教事象を記録した古文書を再版して、そこにヒステリーの観点から註釈を加えるというかたちをとっている。ブルヌヴィルは叢書出版の動機について次のように述べている。

日々観察しているヒステリー（小ヒステリー）、ヒステリー性癲癇（大ヒステリー）、ないし精神異常の事例を、古書に残された記録と比較することで、今日のヒステリー患者ないし一部の精神

異常者と、昔日の悪魔憑きないし神秘主義者との間には相似が、時には完全な類似さえ存在することを、彼ら〔シャルコーの弟子たち〕は明らかにしてきた。これらの古書は現在入手困難になっている。そこで私たちは、そのうち重要度の高いものを選んで注釈を付けるか付けないかして、公衆の手に届くよう再版することはある程度有益だと考えた。私たちが『悪魔憑き叢書』と名付けたのはそうした著作である（角括弧内は引用者による補註）⁽⁵⁷⁾。

ブルヌヴィルの『悪魔憑き叢書』に収録された古文書のなかには、今日の宗教学の観点からも興味深いものが少なくない。たとえば、第3巻で再版されたのは、合理的観点から魔女狩りに反対したことで知られる16世紀の医師ヨーハン・ヴァイヤーの著作である。ブルヌヴィルは合理主義的なヴァイヤーを高く評価しており、自らが与する悪魔憑き研究の祖と位置づけている。

宗教学の観点から『悪魔憑き叢書』がさらに興味深いのは、この叢書が何人かの重要な神秘家を扱っているところにある。第5巻の『シスター・ジャンヌ・デ・ザンジュ』に注目したい⁽⁵⁸⁾。これは、17世紀のルーダンで起きた悪魔憑き事件の主人公ジャンヌ・デ・ジャンヌの『自叙伝』の再版である。その1世紀後、神秘主義研究者ミシェル・ド・セルトーは、『悪魔叢書』版のジャンヌの『自叙伝』を参照しながら、『ルーダンの憑依』を執筆することになる⁽⁵⁹⁾。さらにセルトーはこの『悪魔叢書』版の『自叙伝』を、1985年にもういちど再版している⁽⁶⁰⁾。

とはいえ、サルペトリエール学派が神秘家に向ける視線は、セルトーとその後継者たちのように内在的な「理解」を試みるものではない⁽⁶¹⁾。それはむしろ、ヒステリーという解釈格子による、あらゆる神秘体験の十把一絡げの「説明」である。実際、第5巻ではジャンヌがヒステリー患者と診断されているが、そこでは宗教体験によるジャンヌの内面的な葛藤や苦悩はほとんど言及されていない。ジャンヌの神秘的恍惚に伴う幻視や痙攣は、すべて幻覚や発作といった医学用語で説明されている。医学言語による神秘主義言語の征服がなされているのである。

最終巻『聖テレジアのヒステリー』もまた、神秘主義研究上の重要人物を扱っている。この著作は、16世紀の女性神秘家アビラのテレジアの著作を医学的に分析して、この聖女をヒステリー患者だと診断している。「聖テレジアの聖別はヒステリー患者の聖別でしかない」⁽⁶²⁾。著者によれば、テレジアがその著作のなかで示した観想の諸段階は、ヒステリーの諸段階と一致している。それゆえ、テレジアの規則にしたがうカルメル修道会では、「ヒステリー患者としてのレベルが高いほど、聖者としてのレベルが高い」ということになるという⁽⁶³⁾。

出版面でサルペトリエール学派の宗教研究を牽引したのがブルヌヴィルだとすれば、理論的枠組みを与えたのはシャルコーである。『悪魔憑き叢書』が注目するのは、悪魔憑きと神秘的恍惚という超自然的な宗教事象であるが、叢書とは別に1885年に刊行された『芸術のなかの悪魔憑き』で、シャルコーは悪魔憑きと神秘的恍惚をみずからのヒステリー理論のなかに組み込んでいる。ヒステリーの発作は理論上、類転換期・大運動期・熱情表出期・収束期という4つの時期に区別できるが、悪魔憑きは大運動期の発作が、神秘的恍惚は熱情表出期が強調されたものであるという。

ヒステリー発作のさまざまなバリエーションは普通、私たちが記述してきた型をとって展開する。とはいえ、ある時期だけが別個に現れたり、ある時期が強調されて他の時期が弱められたかたちで現れたりすることもある。かくして、第1の時期は類癲癇型のバリエーションを、第2の時期

は悪魔憑き型のバリエーションを、第 3 の時期は恍惚型のバリエーションを、第 4 の時期は譫妄型のバリエーションを生みだすのである⁽⁶⁴⁾。

かくして、歴史上の悪魔憑きと神秘的恍惚、そして現代の奇蹟的治癒といった宗教事象はすべて、ヒステリーとして再解釈されることになる。つまり、サルペトリエール学派の宗教研究とは、あらゆる宗教事象をヒステリーという病理概念で説明しようとする「宗教病理学」(古野清人)だったのである⁽⁶⁵⁾。次節では、第三共和政初期のフランスという文脈のなかで、サルペトリエール学派の宗教病理学はいかなる意味をもっていたのかについて考察する。

3-2 宗教病理学の社会史的位置づけ

歴史家のエティエンヌ・トリヤは、サルペトリエール学派の宗教病理学を、ナンシー学派との対立という学問内部の文脈に位置づけている⁽⁶⁶⁾。サルペトリエール学派の歴史学的な研究は、ヒステリーがシャルコーの発明物でしかないと批判したナンシー学派に対して、ヒステリーが昔から存在したということを主張するために行われたというのである。しかし、宗教と病理を同一視するサルペトリエール学派の宗教病理学は、精神医学内部の歴史にとどまらない、第三共和政初期のフランス社会というより広い文脈にも位置づけられるように思われる。

第三共和政初期のフランスでは、ライシテを掲げる共和派とカトリックを掲げる教権派の対立が深まっており、この対立は歴史学において「2 つのフランス」の対立と表現されてきたことは先に述べた。教皇ピウス 9 世が 1864 年に『誤謬表』を発して、民主主義や自然主義、進歩や自由という近代的な価値を否定している一方、共和派の首領ガンベッタは 1877 年 5 月 4 日の演説を「教権主義?それは敵だ!」という言葉で締めくくっている。とりわけサルペトリエール学派が活躍した 1880 年代は、この「2 つのフランス」の対立が激化した時期とされる。

この対立には政治的な側面だけでなく社会的な側面もある。一方で、科学的世界観が宗教的世界観を掘り崩している。宗教学史上重要なのは、19 世紀後半のフランスでは、宗教的世界観が自明性を喪失し、科学的分析の対象になることである。エルネスト・ルナンの『イエスの生涯』(1864 年)は象徴的である⁽⁶⁷⁾。科学的眼差しから分析されたイエスの生涯には、感嘆すべき人間の要素はあれども超自然的な奇蹟の余地はない。19 世紀フランスにおける宗教学の成立を跡付けた伊達聖伸は、文献学に依拠しつつ脱政治化したルナンに近代的な宗教学への到達をみている⁽⁶⁸⁾。

他方で、19 世紀フランスでは宗教的世界観も影響力を保ち続けている。歴史家のクロード・ラングロワが示したように、女子修道会の発達は目覚ましい⁽⁶⁹⁾。1808 年から 1878 年までに、修道女の数は 10 倍に膨れている。女子修道会の多くは法的に認可されており、教育と看護の領域で活躍している。規律訓練の場となる教育と、生と死という象徴的瞬間に接する看護を通して、カトリック的な世界観は影響を及ぼし続けている。1880 年代になると、共和派はこうした教会の影響力の源泉を奪い取るために、教育と医療のライシテ政策を推し進めることになる。

ところで、この科学的世界観と宗教的世界観の対立のなかで、アクチュアルな争点になっているのは奇蹟である。マリア崇拝の高まりは 1830 年のパリ、1846 年のラ・サレット、1858 年のルルド、1871 年のポンマンで聖母の出現をもたらししており、カトリック教会はこれらを奇蹟と認めることでお墨付きを与えている。奇蹟が起こった場所は巡礼者が足を運ぶ聖地となる。ルルドは 1870

年代以降、被昇天会の働きにより全国有数の傷病者巡礼地に変化してゆく⁽⁷⁰⁾。こうした奇蹟の流行は1872年のエミール・ゾラをして「奇蹟が驚くほど次々に起こっている」と言わしめている⁽⁷¹⁾。

現代の奇蹟を扱った『科学と奇蹟』と『信仰による治癒』は、こうした奇蹟をめぐる教権派と共和派の対立という文脈に条件付けられている。一方の教権派は、超自然的な奇蹟の存在を認めることで、人々の信仰心を高めようとしている。他方で、ブルヌヴィルとシャルコーは共和派として、奇蹟の治癒や神秘体験という事象は決して超自然的な奇蹟などではないと主張している。サルペトリエール学派の医師たちは、超自然的で宗教的な奇蹟とされた事象に自然科学的な説明を与えることで、奇蹟の聖性を削ぐと同時に、宗教的世界観への信憑性を掘り崩すことを狙っているのである。

過去の宗教事象を扱った『悪魔憑き叢書』もまた、宗教的世界観への信憑性を掘り崩す機能を果たしている。そこでは神聖視の対象である神秘家や聖人と悪魔憑きの対象である悪魔憑きが、いずれもヒステリー患者として同一視されているからである。たとえば、16世紀には、修道女マドレーヌ・バヴオンが悪魔憑きとされると同時に、聖心崇拝の祖マルガリタ・マリア・アラコクが聖人視されている。しかし、ブルヌヴィルによれば、「両者は当時の迷信の悲しき影響に苦しめられた2人の病人でしかない」⁽⁷²⁾。神秘家や聖人が悪魔憑きと同じであり、さらに病人であるという診断は、神秘家や聖人の権威を損なう効果を発揮するだろう。

要するに、サルペトリエール学派の宗教病理学は「2つのフランス」の対立のなかで、科学的な世界観による宗教的世界観へのネガティブ・キャンペーンという意味を帯びているのである。それは当時のカトリック信仰を支えた聖人や奇蹟といった宗教事象をヒステリーとして説明することで、その超自然的性格と神聖さを否定しようとしている。ここでは、中立的であるはずの科学的言説が強い政治的意味を帯びている。サルペトリエール学派の宗教病理学は1880年代の「2つのフランス」の対立において、宗教的世界観への攻撃という強い政治的意味を持っているのである。

サルペトリエール学派の宗教病理学が強い政治的意味を帯びていたことは、第三共和政初期の当時には認識されている。たとえば、人気風刺画家コル＝トックのある作品には、1883年の国民議会議選挙時のブルヌヴィルの姿が描かれている⁽⁷³⁾。そこでのブルヌヴィルは『悪魔憑き叢書』という文字を背にしながら、左手で司祭をつまみあげて、右手で修道女たちを追いかけている。この風刺画は、ブルヌヴィルが編集者を務めた『悪魔憑き叢書』を筆頭とする、サルペトリエール学派の宗教病理学が、反教権主義という政治的意味合いを帯びていたことを物語っている。



図2：風刺画家コル＝トックの描いたブルヌヴィル。Archive de l'Assistance Publique des Hôpitaux de Paris, côte 646 Fosse 2（筆者撮影）。

おわりに

本稿では、第三共和政初期のフランスで活躍した医師ブルヌヴィルについて論じてきた。第1章ではまず、ブルヌヴィルが医師というだけでなく、文筆家でも政治家でもあったことを指摘した。第2章では、政治家ブルヌヴィルによるパリの病院のライシテ化とその両義性を、第3章では、文筆家ブルヌヴィルによる宗教病理学とその社会史的位置づけを論じた。本稿の試みからは、2つの考えを問い直すことができる。ひとつは、ライシテと男女平等という2つの価値は不可分とする考えである。もうひとつは、宗教学の形成と発展は社会的文脈とは関係がないとする考えである。

第一に、現代のフランスでは、男女平等とライシテを同一視する言説が、イスラームのヴェールをライシテの名において規制することを正当化している。イスラームのヴェールが男尊女卑の象徴とされる一方、共和国のライシテが男女平等の象徴とされているからである。こうしたなかで、イスラームのヴェールがかならずしも男尊女卑の象徴でないことは、これまで多くの研究によって指摘されてきた⁽⁷⁴⁾。しかし、ライシテ研究の観点からすれば、男尊女卑としてのヴェール表象とセットになっている、男女平等としてのライシテ表象も問い直されねばならない。

本稿の第2章における試みは、ライシテと男女平等の混同を問い直すことにつながるだろう。たしかに、ブルヌヴィルによる病院のライシテ化は、世俗女性に社会進出への道を拓いたと言えるかもしれない。しかし、パリの病院のライシテ化にはむしろ、女性性に看護の資質を求めるジェンダー化や、女性を男性の補佐役とする考えが伴っていた。これは、今日のフランスにおける男女平等としてのライシテ表象が、決して本質的なものではなく、20世紀後半という特殊な社会的・歴史的な状況のなかで創り出されたものであることを示唆している。

第二に、かつての宗教学史研究は、宗教学理論を社会的文脈から独立したもののみなし、宗教学理論同士の内的な繋がりに注目していた。しかし、近年の宗教学史研究では、宗教学の形成と発展に社会的な文脈が大きな影響を与えてきたことが強調されている⁽⁷⁵⁾。実際、いくつかの宗教学史研究は、黎明期の宗教学が近代批判や植民地主義といった社会的文脈のなかで成立したことを明らかにしている⁽⁷⁶⁾。本稿の第3章ではささやかながら、サルペトリエール学派の宗教病理学の場合、それが「2つのフランス」の対立という文脈に規定されていたことを指摘した。

とはいえ、サルペトリエール学派の宗教病理学は、社会史の文脈だけでなく、宗教学史の文脈にも位置づけ直さねばならないだろう。古野清人やピナール・ド・ラ・ブーレイは戦前の宗教学史研究において、フランスではドラクロアやジャンネの宗教心理学に、アメリカではジェイムズやリューバの宗教心理学に、ドイツではフロイトの精神分析に、サルペトリエール学派の宗教病理学が批判的に継承されたことを指摘している。こうしたサルペトリエール学派の宗教病理学の宗教学史的位置づけ、そしてその忘却の理由の考察については今後の課題としたい。

註

- (1) 日本では宗教学から伊達聖伸が、法学から小泉洋一が、歴史学から谷川稔が、教育分野に着目したライシテ研究を牽引してきた。伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学——もうひとつの19世紀フランス宗教史』勁草書房、2010年。小泉洋一『政教分離と宗教的自由』法律文化社、1998年。谷川稔『十字架と三色旗——もうひとつの近代フランス史』岩波書店、1997年。

- (2) J. Lalouette, « Expulser Dieu : la laïcisation des écoles, des hôpitaux et des prétoires » dans *Mots*, n°27, juin 1991, sous la direction de E. Balibar, et S. Bonnafous et P. Fiala, pp. 23-39.
- (3) 医療のライシテ化の歴史的展開を主題化した先行研究としては以下のものがある。次の三つの論集は、政教分離法制定 100 周年に合わせたシンポジウムの成果を書籍化したものである。J. Lalouette (éd.), *L'hôpital entre religions et laïcité. Du Moyen âge à nos jours*, Pais, Letouzey & Ané, 2006. S. Mathieu, « Quelle laïcisation de la médecine française au XIXe siècle ? », dans P. Weil (éd.), *Politiques de la laïcité au XXe siècle*, Paris, PUF, 2007, pp. 353-371. また 2005 年には、*Revue de la Société française d'histoire des hôpitaux* 誌が、特集 « La laïcisation et les hôpitaux. La loi du 9 décembre 1905, bilan d'un siècle » を組んでいる。2010 年には、ライシテ研究の第一人者であるジャン・ボベロが、哲学者ラファエル・リオジェとともに、革命から現代までのライシテと医療の関係をまとめた著作を出版している。J. Baubérot et R. Liogier, *Sacrée Médecine*, Paris, Entrelacs, 2010.
- (4) 古野清人『古野清人著作集——7 宗教の社会学・心理学』三一書房, 1972 年, 184 頁。H. Pinard de la Boullaye, *Étude comparée des religions*, tome1 « Son histoire », Paris, Gabriel Beauchesne, 1922, pp. 410-415. ブラックウェル版『比較宗教学』の「神秘主義」の項目ではシャルコーの宗教研究が簡単に触れられている。R. A. Seagal (ed.), *The Blackwell Companion to the Study of religion*, Malden, Mass.: Wiley-Blackwell, 2006, pp. 327 and 329.
- (5) J. Léonard, *La Médecine entre les pouvoirs et les savoirs*, Paris, Aubier, 1981. J. Goldstein, *Console and classify. The French psychiatric profession in the nineteenth century*, New York: Cambridge University Press, 1987.
- (6) J. Gateaux-Mennecier, *Bourneville et l'enfance aliénée : l'humanisation du déficient mental au XIXe siècle*, Paris, Centurion, 1989. J. Gateaux-Mennecier, *Bourneville, la médecine mentale et l'enfance : l'humanisation du déficient mental au XIXème siècle*, Paris, L'Harmattan, 2003. 星野常夫「ブルヌヴィル, D.M. (1840-1909) の経歴と著作・論文」『文教大学教育学部紀要』28 巻, 1994 年, 82-94 頁。同「ブルヌヴィル, D.M. とフランス 1909 年 4 月 15 日法 (「精神薄弱児」教育法) の成立について」『文教大学教育学部紀要』30 巻, 1996 年, 111-120 頁。同「フランス 19 世紀末ブルヌヴィル, D.M. の知的障害児教育について——ビセートル院における教育実践と否定的優生思想に対する見解」『文教大学教育学部紀要』34 巻, 2000 年, 15-23 頁。管見の限り, 本邦でブルヌヴィルを主題化したのは星野のみである。
- (7) Y. Knibiehler, V. Leroux-Hugon et al, *Cornettes et blouses blanches. Les infirmières dans la société française (1880-1980)*, Paris, Hachette, 1984, esp. pp. 41-79. V. Leroux-Hugon, *Des saintes laïques. Les infirmières à l'aube de la troisième république*, Paris, Sciences en situation, 1992. K. Schultheiss, *Bodies and Souls. Politics and the Professionalization of Nursing in France, 1880-1922*, London: Harvard University Press, 2001, esp. pp. 20-50.
- (8) シンポジウムの成果は翌年書籍化された J. Poirier et J-L. Signoret (éd.), *De Bourneville à la sclérose tubéreuse. Un homme, une époque, une maladie*, Paris, Flammarion, 1991.
- (9) J. Poirier et Ch. Derouesné, « L'image de Bourneville » dans *Ibid.*, p. 155.
- (10) ブルヌヴィルの経歴については以下。J. Gateaux-Mennecier, *Bourneville et l'enfance*

- aliénée : l'humanisation du déficient mental au XIXe siècle*, Paris, Centurion, 1989, pp. 39-51. J-L. Signoret, Ph. Ricou et J. Poirier, « Bourneville (1840-1909). Repères chronologiques », dans J. Poirier et J-L. Signoret (éd.), *op.cit.*, pp. 3-7.
- (11) R. Durand-Fardel, *L'internat en médecine et en chirurgie des hôpitaux et hospices civiles de Paris*, Paris, G. Steinheil Éditeur, 1904, p. 266.
- (12) J. Gasser, « Bourneville, Journaliste et éditeur » dans J. Poirier et J-L. Signoret (éd.), *op.cit.*, pp. 66-72.
- (13) D-M. Bourneville, « L'art médical », *Le panthéon de l'industrie et des arts* du 25 août 1867.
- (14) J. Lalouette, « Le citoyen Bourneville, Militant républicain et libre-penseur », dans J. Poirier et J-L. Signoret (éd.), *op.cit.*, pp. 39-42.
- (15) *Le Progrès médical*, n°1 du 14 juin 1873. D-M. Bourneville, « Bulletin du Progrès Médicale, 1873-1883 », *Le Progrès médical*, n°1 du 6 janvier 1883.
- (16) M. Loeper, « Histoire du Journal », *Le Progrès médical*, tome1, 1922, p. 585.
- (17) Ch. Richet, « Aux temps héroïques de la médecine, 1872-1878 », *Le Progrès médical*, n°50 du 16 décembre 1922, p. 590.
- (18) 倉方健作「解説」鹿島茂・倉方健作『カリカチュアでよむ 19 世紀末フランス人物事典』白水社, 2013 年, 485 頁。19 世紀フランス研究者の鹿島茂は、『今日の人々』全 469 号の現物を所蔵している。上記の著作は, 全号のカリカチュアをカラーで掲載した世界初の書籍である。
- (19) *Les hommes d'aujourd'hui*, 3e volume, No157. 本稿に掲載されているのは, 東京大学文学部図書館に所蔵されている『今日の人々』の該当箇所を筆者が撮影したものである。
- (20) パリのアシタンス・ピュブリーク (Assistance Publique) とは, パリの病院を管轄する公的機関である。第三共和政初期のアシタンス・ピュブリークはパリ市議会からの補助金に財政面で強く依存しており, その病院運営はパリ市議会の意向に左右される傾向にあった。
- (21) F. Delrieu et J. Poirier, « Bourneville, Député », dans J. Poirier et J-L. Signoret (éd.), *op.cit.*, pp. 61-65.
- (22) 長井伸仁「第三共和政期のパリ市議会議員(1871-1914)」『史林』82 巻 4 号, 33-72 頁, 1999 年。
- (23) J. Léonard, *op.cit.*, p. 281.
- (24) B. Brais, « Désiré Magloire Bourneville and French Anticlericalism », D. Porter and R. Porter ed, *Doctors, Politics and Society. Historical Essays*, Amsterdam: Brill Rodopi, 1993, pp. 116-118.
- (25) J. Ferry, Discours à la salle Molière le 10 avril 1870, dans G. Gauthier et C. Nicolet (éd.), *La laïcité en mémoire*, Paris, Edilig, 1987, p. 182.
- (26) 教育のライシテ化をジェンダーの観点から論じたものとして, フロレンス・ロシュフォールの研究を参照。F. Rochefort, "Religions, genre, et politiques laïques en France, XIXE-XXE siècles," *French Politics, Culture and Society*, vol. 25, n°2, 2007, p. 19+.
- (27) D-M. Bourneville, Conférence fait à l'association philotechnique le 26 décembre 1880,

- dans *La laïcisation de l'Assistance publique*, Paris, Bureau de Progrès Médical, 1881, pp. 5-6.
- (28) *Le Progrès médical*, n°18 du 1 mai 1880.
- (29) D-M. Bourneville, Discours prononcé le 17 mars au Conseil municipal, dans *La Justice*, n° du 19 mars 1881. *La Justice* はジョルジュ・クレマンソーの主催する左派系雑誌である。
- (30) パリ市行政が病院のライシテ化に際してアウグスティノ修道会に配慮していたことを指摘した研究は以下。野口理恵「パリの病院とアウグスティノ会——第三共和制前期におけるアシスタンス・ピュブリーク傘下の病院の世俗化」『人間文化研究科年報』第 31 号, 39-49 頁, 2016 年。
- (31) D-M. Bourneville, *Manuel pratique de la Garde-malade et de l'infirmière*, tome 2 « Administration & comptabilité hospitalières », 1889, pp. 10-11.
- (32) *Le Progrès médical*, n°31 du 3 août et n°33 du 17 août 1878.
- (33) Dr Bourneville, *Manuel pratique de la Garde-malade et de l'infirmière*, tome 1-5, 6^e éd., 1897. 東京大学医学部図書館は『看護婦マニュアル』の第 6 版を所蔵している。
- (34) D-M. Bourneville, *op.cit.*, p. 8.
- (35) *L'Union Médical*, n°26 du 20 février 1881.
- (36) *Gazette des hôpitaux*, n°32 du 17 mars 1881 et n°33 du 24 mars 1881. *Le Progrès Médical*, n°12 du 19 mars 1881.
- (37) エリザベート・バダンテール『母性という神話』鈴木晶訳, 筑摩書房, 1998 年。
- (38) フランスにおいて看護の役割が女性に委ねられてゆく歴史的過程を研究した佐藤典子は、「近代以降になってジェンダー化された看護という役割の, その誕生のきっかけが宗教などの伝統的な言説にあること (…), それを定着させたのが, 脱宗教化を目指したはずの近代化, とりわけ医療化にあること」を指摘している (佐藤典子『看護職の社会学』専修大学出版局, 2007 年, 227 頁)。佐藤は前近代から近代までを射程に入れたマクロな議論を展開しているが, 本節では 1880 年代のブルヌヴィルとデブレの論争のみに焦点を絞り, 病院のライシテ化をめぐる論争における女性の位置を明らかにする。ブルヌヴィルとデブレの論争はフランス医療社会史上よく知られているが, この論争をジェンダーの観点から扱ったものとしては, ルルー＝ユーゴンやシュルティスらの看護史研究を参照。V. Leroux-Hugon, *op.cit.* K. Schultheiss, *op.cit.*
- (39) D-M. Bourneville, Discours prononcé le 20 octobre à l'école de la Salpêtrière, dans *Le Progrès Médical*, n°43 du 24 octobre 1885, et *Laïcisation de l'assistance publique*, Paris, Bureau de Progrès Médical, 1886, pp. 45-46.
- (40) A. Després, *Les sœurs hospitalières*, Paris, Calmann Lévy, 1886, p. 230.
- (41) 19 世紀中盤のフランスにおける女性労働者の問題についてはジョーン・スコットの研究を参照。ジョーン・W・スコット『増補新版 ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳, 平凡社, 2004 年, 特に第二部「歴史のなかのジェンダー」197-335 頁。
- (42) J. Michelet, *La femme*, 2e éd., Paris, L. Hachette et Cie, 1860, p.22. ジュール・ミシュレ『女』大野一道訳, 藤原書店, 1991 年, 21・31 頁 (訳文は一部変更した)。

- (43) J. Simon, *L'ouvrière*, 5e éd., Paris, L. Hachette et Cie, 1864, pp. IV-V.
- (44) A. Després, *op.cit.*, pp. 223-224.
- (45) *Ibid.*, p. 4.
- (46) *Ibid.*, p. 224.
- (47) *Ibid.*, p. 227.
- (48) D-M. Bourneville, Conférence fait à l'association philotechnique le 26 décembre 1880, dans *La laïcisation de l'Assistance publique*, Paris, Bureau de Progrès Médical, 1881, p. 23.
- (49) D-M. Bourneville, Discours prononcé le 20 octobre à l'école de la Salpêtrière, dans *Le Progrès médical*, n°43 du 24 octobre 1885, et *Laïcisation de l'assistance publique*, Paris, Bureau de Progrès Médical, 1886, pp. 53-54.
- (50) 本稿では扱わないが, 19 世紀末のフランスでは女性の医療専門職への進出が議論されている。医学界の反応はおおよそ否定的なものだった。ジャン＝ルイ・ドブレ, ヴァレリー・ボシュネク『フランスを目覚めさせた女性たち』西尾治子・松田裕子・吉川佳英子・佐藤浩子・田戸カンナ・岡部杏子・津田奈菜絵訳, バド・ウィメンズ・オフィス, 2016 年, 特に第 9 章。
- (51) ボーヴォワール『決定版 第二の性』『第二の性』を原文で読み直す会訳, 新潮社, 2001 年。
- (52) 第三共和政初期の宗教学の制度化は, プロテスタント研究者を中心に進められた。特に創設期の EPEH 第五部門において, 宗教学は「科学の装いを施したプロテスタント神学の趣さえあった」。伊達聖伸, 前掲書, 第Ⅲ部「宗教学の制度化と展開: 宗教学の「宗教」概念」393 頁。対して, サルペトリエール学派の医師の大半は自由思想家か, 自由思想に共鳴する人物であった。
- (53) D-M. Bourneville, *Science et miracle. Louise Lateau ou la stigmatisée belge*, 2nd éd., Paris, Bureaux du Progrès médical et V.A. Delahaye et Cie, 1878 (初版 1875 年)。
- (54) *Ibid.*, p. 67.
- (55) J-M. Charcot, *La Foi qui guérit*, Paris, Bureaux du Progrès médical et Félix Alcan, coll. « Bibliothèque diabolique », 1897, pp.3-4 (= J-M. Charcot, *La Foi qui guérit. Suivi de J.-M. Charcot par G. G. de La Tourette*, Paris, Payot & Rivages, 2015, p. 53).
- (56) 『悪魔憑き叢書』の概要については以下を参照。P. Galanopoulos, « The 'Bibliothèque diabolique' of doctor Bourneville (1882-1902) », *Vesalius*, 17-2, 2011, pp. 89-98.
- (57) *Histoire, disputes et discours des illusions et impostures des diables, des magiciens infâme, sorcières et empoisonneurs... par Jean Wier*, Paris, Bureau du Progrès Médical et A. Delahaye et Lecrosnier, coll. « Bibliothèque diabolique », 1885, volume1, p. II.
- (58) *Sœur Jeanne des Anges supérieure des ursulines de Loudun (XVIIe siècle). Autobiographie d'une hystérique possédée, annoté et publié par les docteurs Gabriel Legué et Gilles de la Tourette, préface de M. le professeur Charcot*, Paris, Bureau du Progrès Médical et A. Delahaye et Lecrosnier, coll. « Bibliothèque diabolique », 1886.
- (59) ミシェル・ド・セルトー『ルーダンの憑依』矢橋透訳, みすず書房, 2008 年 (原書 1970 年)。
- (60) Jeanne des Anges, *Sœur Jeanne des Anges supérieure des ursulines de Loudun (XVIIe*

- siècle). Autobiographie d'une hystérique possédée, préface de Charcot, suivi de Jeanne des Anges par Michel de Certeau, Montbonnot-Saint-Martin, Édition Jérôme Million, 1985.*
- (61) セルトーの神秘主義研究は今日の宗教学にも影響を与えている。日本宗教学では、特に鶴岡賀雄と渡辺優がセルトーの神秘主義理解を継承している。鶴岡賀雄「「神秘主義」概念の歴史と現状」『東京大学宗教学年報』XXXIV, 2016 年。渡辺優『ジャン＝ジョゼフ・スュラン——十七世紀フランス神秘主義の光芒』慶應義塾大学出版会, 2016 年。
- (62) *Ibid.*, p. 2.
- (63) *Ibid.*, p. 34.
- (64) J-M. Charcot et P. Richer, *Les démoniaques dans l'art*, Paris, A. Delahaye et É. Lecrosnier, 1887, p. 103 (=J-M. Charcot et P. Richer, *Les démoniaques dans l'art. Suivi de La foi qui guérit de J.M. Charcot, Introduction de Pierre Fédida et Postface de Georges Didi-Huberman* Paris, Maluca, 1894, p. 103).
- (65) 古野清人, 前掲書, 182-184 頁。
- (66) エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』安田一郎・横倉れい訳, 青土社, 1998 年, 62 頁。
- (67) E.ルナン『イエスの生涯』忽那錦吾・上村くにこ訳, 人文書院, 2000 年。
- (68) 伊達聖伸, 前掲書, 149-194 頁。
- (69) C. Langlois, *Le Catholicisme au féminin. Les congrégations françaises à supérieure générale au XIXe siècle*, Paris, Les Edition du Cerf, 1984, p. 321.
- (70) 寺戸淳子「奇蹟の聖地と医師——ルルド傷病者巡礼を通してみる宗教と科学」中野智世・前田更子・渡邊千秋・尾崎修治編『近代ヨーロッパとキリスト教——カトリシズムの社会史』勁草書房, 2016 年, 231-262 頁。
- (71) 1872 年 9 月 29 日付け『クロッシュ』誌に寄せた記事での記述。小倉孝誠・菅野賢治編『〈ゾラ・セレクション〉時代を読む——1870-1900』藤原書店, 138 頁。
- (72) D.-M. Bourneville et P. Regnard, *op.cit.*, Paris, Bureau du Progrès médical et V. Adrien Delahaye, 1878, p.225
- (73) Archive de l'Assistance Publique de Paris, 646 Fosse 2. 本稿に掲載されているのは、現在パリのアシスタンス・ピュブリークのアーカイヴに保存されている風刺画を、筆者が許可を得たうえで撮影したものである。保存方法の問題から、この風刺画が具体的にどの雑誌媒体に掲載されたのかは不明である。しかし、風刺画上部に「1883 年 2 月 4 日の第 2 次投票」と記されていることから、1883 年の国民議会投票前後に出版されたものと推測される。
- (74) F. Gaspard et F. Khosrokhavar, *Le foulard et la République*, Paris, La Découverte, 1995. R. Liogier, *Une laïcité « légitime ». La France et ses religions d'État*, Paris, Entrelacs, 2006.
- (75) 日本では 2010 年から 2012 年にかけて、池澤優を代表とする「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」の研究グループが組織された。その成果は『東京大学宗教学年報』XXX 号の特別号にみることができる。フランスの宗教学史については以下。伊達聖伸「フランスにおける宗教学・宗教研究の歴史的条件と一般的特徴——パリ高等研究院 EPHE 宗教学部門の展開を中心に」『宗教学年報』XXX 号 (特別号), 2013 年,

159-178 頁。

- (76) デイヴィッド・チデスター『サベッジ・システム——植民地主義と比較宗教』沈善瑛・西村明訳，青木書店，2010 年。ハンス・G・キッペンベルク『宗教史の発見——宗教学と近代』月本昭男・渡辺学・久保田浩訳，岩波書店，2005 年。

Bourneville, laïcisation hospitalière et l'étude religieuse

Hiroki TANAKA

De l'importance reconnue de la laïcisation scolaire des années 1880 dans l'histoire de la laïcité française, ces dernières années, la laïcisation hospitalière à la fin du 19^{ème} siècle attire l'attention académique. Avec l'école et l'instituteur, l'hôpital en tant que centre du « progrès médical » et le médecin en tant que « nouvelle couche » font office de poste républicaine d'avant-garde dans le conflit de « deux France ».

En même temps, la formation de la science religieuse suit parallèlement à la naissance de la Troisième République. Derrière de l'installation de la 5^e section de l'EPHE dans laquelle les protestants jouent un rôle important, est tombé dans l'oubli un certain nombre de médecins, souvent agnostiques ou athées, qui étudient la religion, l'étude médico-religieuse remarquée par « la foi à la science ».

Désiré Bourneville (1840-1909), médecin de l'École de la Salpêtrière et homme politique républicain, se place au carrefour de ces deux mouvements. Suite à la description de sa biographie (I^{er} chapitre), cet article analyse la laïcisation hospitalière de Paris du point de vue du genre (II^e chapitre), et situe l'étude religieuse de l'École de la Salpêtrière au contexte socio-politique de la fin du 19^e siècle (III^e chapitre).